

令和7年度 第1回学校運営協議会

議 事 録

日時 令和7年6月3日(火) 13:30～16:00

場所 岡山県立勝間田高等学校 記念館3階会議室
(委員15名のうち、10名が出席)

1 校長挨拶(任命書交付)

- 委員を任命するにあたっての根拠
- 美作地区東部中学校卒業(予定)者数の推移
- 令和7年度各系列(コース)在籍数
- 令和7年度学校経営計画書

2 出席者紹介

3 学校運営協議会について

- (1) 岡山県立学校における学校運営協議会の設置について
 - 岡山県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則
 - 岡山県立学校における学校運営協議会の運営等に関する要綱
 - コミュニティ・スクール図説
- (2) 岡山県立勝間田高等学校における運営協議会について

4 会長選出

水嶋 淳治 氏 で承認

5 会長挨拶

- 水嶋新会長が就任の挨拶と現状認識を述べた。
- 地域の人口減少が進む中で、現在の学校規模を維持することは困難であるとの見解を示した。
- 学校運営協議会として取るべき方向性について提言した。
- 勝間田高校の魅力を確立・発信し、中学生が進学したくなる学校づくりを推進することが確認された。
- 水嶋会長が、第1回学校運営協議会の開会を正式に宣言し、事務局に現状と課題の説明を求めた。

6 本校の現状と課題

- (1) 令和6年度の教育活動について
- (2) 令和6年度学校評価書について
- (3) 令和7年度学校経営計画等について
- (4) 令和8年度教科書選定の観点について
- (5) 令和7年度の主な行事について
- (6) 高校コーディネーターによる高校と地域の連携・協働推進事業について

～ 10分休憩 ～

7 質疑・応答・意見交換

【委員】

不登校・長期欠席生徒の復帰支援策としての自立応援室の役割について教えてほしい。

【事務局】

自立応援室は、不登校や長期欠席の生徒が教室へ復帰するためのステップとして位置づけられている。まずはオンライン学習を併用し、学校への登校に慣れることから始める。慣れてきたら自立応援室に登校し、徐々に教室での授業に参加する、という段階的な復帰プランが想定されている。このような支援体制の設置は、生徒の状況に応じたステップを提供できるため、有益であると認識している。

【委員】

生徒募集には、主に二つの異なるターゲット層が存在すると考えられる。

特定分野志望層：森林や自動車など、専門的な学びを求める生徒。実際の満足度を分析し、ターゲットに情報が届いているか検証・発信を強化する。

支援層（配慮が必要な生徒）：他校での適応が困難だが本校なら通えるという生徒。自立応援室などのサポート体制を継続し、安心して学べる環境を維持する。

生徒の関心を引くため、時代に即したキーワードへの名称変更や再編を検討すべきではないか。例として、自動車分野に「EV化」や「次世代ビジネス」の視点を取り入れるなど、将来性のある打ち出しが考えられる。系列の再編や名称変更に要する「期間」や「手続き」を明確にする必要がある。これらの改革を実行に移すための「予算」や「人材」など、具体的に何が 필요한かを明確にする必要がある。

【事務局】

意欲を持って入学した生徒の満足度を測る参考データとして、学校自己評価アンケートの結果を共有。「勝間田高校に入学し、充実感や満足感を持っているか」という質問に対し、肯定的な回答は76.8%（令和6年度）。「系列の実習、校外学習に意欲的に取り組んでいるか」という質問に対し、肯定的な回答は87.5%（令和6年度）、90.5%（令和5年度）と非常に高い。高い満足度の背景には、特色ある専門的な系列の存在があると分析されている。不登校・長期欠席だった生徒が本校で通学を継続できる理由として、普通教科中心の学びから、生徒自身の興味関心が生かされる専門的な学びに移行することが、学校へ来る喜びにつながっているのではないかと。

【事務局】

過去に「グリーン環境科」という名称だった系列が、学びの内容が不明確になるという反省から、現在は「森林」という具体的な名称に変更された経緯がある。現在の5系列の名称は、学びの内容が明確にわかるように設定されている。今後の課題として、生徒数の減少が挙げられる。学校の魅力化をさらに進め、募集活動に力を入れていきたい。

【事務局】

予算面での長年の課題は、遠方から入学を希望する生徒のための住居（寮など）の確保である。他校の事例の共有。

【委員】

課題解決の一つの方向性として、地域企業との連携がある。人手不足に悩む優良企業と、就職を目指す生徒との間にミスマッチが存在する。このギャップを埋めるための仕組み（例：バイターンシップの活用）を企業と連携して構築できれば、それが学校の新たな魅力となり、遠方からの生徒募集にも繋がるのではないかと。

【校長】

県の基本的なスタンスとして、学校の魅力化は「地域と連携し、地域の産業や事業と一体となって

地域ぐるみで魅力を作っていく」という方向性。県は直接的に資金を拠出するというよりは、良いアイデアに対して支援するという姿勢である。

【委員】

スクールミッション「地域や社会で活躍、貢献できる人材の育成」について伺いたい。

質問1：勝央町で、どのような力を持った生徒を育成することが地域・社会貢献に繋がると考えているか。

質問2：重点目標に掲げられている「キャリア教育の充実」とは、具体的にどのような教育を指すのか。

【校長】

- ・育成したい能力として、専門知識、課題解決力、コミュニケーション能力を挙げた。
- ・専門性を生かした就職の現状と課題について言及した。
- ・キャリア教育の本質として、コミュニケーション能力の重要性を強調した。
- ・これらの教育活動の成果を客観的に検証し、「見える化」する必要性を認めた。

【委員】

体験活動は自己肯定感が低い生徒の肯定感を徐々に高める上で重要である。社会に求められる人材像の参考として、経済産業省が令和4年5月に発表した「未来人材ビジョン」では、これからの社会で求められる力として「創造力」「探究心」「問題対応能力」「多様性」「協働性」などが挙げられている。

【議長】

農業関連産業への就職の現状について、学校の役割として農業分野への貢献も検討すべきではないか。

【事務局】

各系列の就職状況と特性について補足説明。学校の重要な役割として、地域を支える人材を社会に送り出している実績を説明。

【委員】

入学者数の減少に対する地域の危機感が薄い。コミュニティ・スクールとして、学校は危機的な状況を地域に積極的に開示し、地域と共に解決策を探るべきではないか。地域全体で「勝間田高校を応援するムード」を醸成することが極めて重要である。

【委員】

生徒募集において「3年間でどのような進路を拓けるか」を具体的に「見える化」することが重要。卒業生の成功事例を積極的にPRする必要がある、「多様な進路の可能性のある学校」であることを中学校等に発信すべきではないか。

意欲の高い生徒が集まる集団を作るべきではないか。全生徒の上位3割が高い目標を持つようになれば、集団全体のレベルが向上する。

オープンスクールの周知徹底が必要ではないか。運営協議会のメンバーが協力し、町内の様々な場所にオープンスクールのポスターを掲示するなど視覚に訴える広報活動を展開すべき。

【委員】

取得可能な「資格」を学校の魅力として強力にPRしてはどうか。OB・OGの視点から学校の魅力を発信することも有効である。情報を提供しなければ、相手は検討することすらできないため、どのような形でPRを強化し、改善に繋げるべきではないか。

【委員】

「地域づくり推進事業」について2点伺いたい。

質問1：「特産品開発事業」において、具体的にどのような商品の商品化を目指しているのか。

質問2：普及センターが毎年開催している「農業者のつどい」での活動事例発表について、今年度

も依頼可能か。依頼可能な場合、発表を担当する系列と担当教員は誰になるか、現時点で分かれば教えてほしい。

【事務局】

特産品開発事業のサービス開発プロジェクトは、活動の継続が困難なため令和8年度で終了予定。このプロジェクトは、奈義町で約20年間、地域住民の協力を得てわさびを栽培する活動を行ってきた。しかし、校内の授業や実習のため、生徒が現地で活動できるのは3ヶ月に1度程度という状況である。

・過去の活動実績：

- ・地域住民の指導による「わさびのたまり漬け」作り体験（年1回）。
- ・食品系列と連携し、事業者の指導のもと「わさびチーズ」を試作。
- ・津山市のジェラート店「ラッテ」と連携し、栽培したわさびを使用した「わさびジェラート」を開発・販売。事前に食品安全検査を実施し、菌がないことを確認済み。高校側でジェラートを買取り、勝央町の祭りで販売した実績もあり。

今年度の普及センター関連の地域発表会では、食品系列がアスパラガスを用いた商品開発について発表する予定。食品系列は、アスパラガスを使用した調理法や商品開発に関するプロジェクト活動に取り組んでいる。この活動内容について、地域発表会で発表する予定。

【議長】

地元の産業に発展することはできないのか。

【事務局】

奈義町におけるわさび栽培について、現状と課題を説明。

【委員】

生徒は勝間田高校や地元への関心が高く、オープンスクール等にも積極的。学習成果を地域でアウトプットする場を設けることで、知識の定着と自信（自己肯定感）につなげたい。高校生が小学生に農業を教える活動は、高校生には「教える自信」を、小学生には「身近なロールモデル」を与え、双方に良い刺激となる。活動制限や休日休止に伴い、中学生が地域活動に参加しやすい環境が整いつつある。今後はこの流れをさらに促進する。「教員の付き添い」を前提としない仕組み作りが急務。地域側も「教員は顔を出さず程度で、生徒のみの参加を歓迎する」との姿勢を示しており、地域資源を活かした持続可能なキャリア教育を推進する。

不登校や特別支援を要する生徒が増加中だが、高校の教員配置は手薄な現状にある。人員を重点配置する「特例校」のような仕組みの検討が必要。対人関係は苦手でも、地道な作業を得意とする生徒も多い。こうした生徒が将来の農業の担い手となる可能性を視野に入れ、学校は「自己決定」と「活躍」ができる多様な場を用意することが期待されている。

【委員】

卒業後に農業で成功している若者も地域には存在する。農業で成功し高収入を得ている事例などを紹介し、高校生に夢を与えるような魅力発信が重要である。課題研究および総合的な探究の時間の発表会で生徒が見せる生き生きとした姿は、自己肯定感につながる良い取り組みであり、今後も継続が期待される。

【委員】

勝間田高校に進学した生徒が、希望した活動を通じて充実した学校生活を送り、就職まで結びついた、という成功のストーリーを中学生に伝えることが非常に重要である。在校生の協力を得て、体験談を動画に撮り、中学校に配布したり、Webで公開したりする方法が考えられる。

【議長】

●貴重な意見への感謝を述べられた。

8 その他

(1) 第2回学校運営協議会について 10月下旬～11月上旬で調整

(2) その他

○清風祭体育の部のご案内